

良弘と手を組んだ。井戸は松永を討ち果たす心積りであった。松永は信貴山城しぎさんから一万余りの兵を出して辰市城を厳しく攻めた。井戸が城を堅固に守っているところに、順慶は宇陀郡より十市と越智の二人を引き連れて、山づたいに辰市の東の山に到着した。郡山城主や小泉城主など順慶の一門は皆ことごとく松永に敵対し、順慶の後援に回ったため、松永も辰市の城を捨てて家臣団を率いて戦った。井戸良弘も自身の軍勢を出して松永を攻めた。松永方への攻め手が多勢であったため、松永軍は南都に敗走し、筒井軍はさらに後を追って松永の家臣を攻撃した。松永軍は敗北し、多聞城たもんに戻り城への道筋を遮断した。すなわち、松永は南都の南の方角にある京終きょうはつという脇道へ退却し、町の入り口に火をつけて煙に紛れてようやく多聞城へ戻った。松永方の重臣は多数討ち死にした。

順慶は、このまま多聞城へ押し寄せて攻め入るように命令したが、家臣の島清興・松倉重信の意見は「今多聞城へ押し寄せたとしてもすぐには落城させることができず、そうなれば後々反撃にあうかもしれないので、まず城に入り暫く様子を見るのが良い」というもので、これに決した。そのことを織田信長に報告しようと、明智光秀の取りなしをもって伝えたところ、信長の返事は、「南東の古市城ふるいちを砦に定めて、多聞城を追撃するように」とのことであったが、結局合戦はなく足輕を出して戦うのみであった。松永は筒井城に置いていた見張りの軍勢を出陣させたものの、そのまま城を明け渡した。

順慶が密かに計略をめぐらし信長の臣下となったのを知り、松永久秀も信長に従うこととした。そのため、久秀は順慶と和睦し、多聞城は久秀の所有と決まり、久秀は信貴山城へ帰った。順慶も代々の本拠である筒井城へ入って、大和国の三分の二の国侍を配下に従え、信長へ臣従することとなった。

そうしたところ、松永は信長に対して謀叛むほんを企て、信貴山城に籠城した。そのため織田信忠を大将とする軍勢が信貴山城に押し寄せた。順慶も